

鴻 koh

月刊俳句誌

令和5年10月1日発行
(毎月1回1日発行)
第18巻第10号 通巻208号

10_{月号}
2023



瘦身の師と瘦身の吾に秋

日蓮の寺に始まるお風入

土用太郎夜の風車の回りだす

広島の日よ啄木鳥が樹を叩く

小さめの螢籠手に姉おとと

草の絮日差しの軽うなりにけり

夕焼だんだん玩具屋前の日向水

旧家一軒燕返しの風の色

ゐのこづち言問にある雨情の碑

ひつそりと鬼の捨子に宵のくる

日を溜めてふはりふはりと糸蜻蛉

月出でよ漱石の居のほととぎす

今生よ来世よ浦の夕月夜

鬼の捨子

主宰作品

増成栗人

荒川心星



雲駈けよ

茅葺きの庵が一つ夏の雨
杖止めよ畦の傍への雨蛙
つつじつつじ妖精のごと虻がくる
神域の奥^{おく}処^どの杜の青葉木菟
鳥の去り鳥来る水辺著莪の花
川辺りの風がときをり鮎を焼く
青やませ龍神の棲む深淵に
雲駈けよ蘇鉄の花の逞しき

家裏に至る流れや藻が咲いて

梅花藻のよく咲きたるとこれからと

湧水が流れの始めつくつくし

また降り出しぬ青々と栗の毬

遠に散る白さるすべり緩やかに

日暮るるや木の葉のやうに蟬の降り

夏終りけり蹠の湿布葉

吊りしまま水の匂ひの秋簾

藻が咲いて



半谷洋子

俳 作品抄

会員選

ま つ く ろ な 鉄 の 蝶 番 炎 暑 かな
才 能 は 買 ふ こ と で き ず 雲 の 峰
犬 の 舌 長 く な り た る 大 暑 かな
浴 衣 掛 け 夜 風 よ ろ し き 島 の 宿
真 夏 日 に 堪 へ る 体 の ス ト レ ッ チ

野 村 昌 代
後 藤 美 帆
綾 戸 五 十 枝
三 浦 信 行
上 杉 馨

谷口摩耶 選

同人選

喪 の 明 け て ハ イ ビ ス カ ス の 咲 く 岬
夏 の 夜 の ひ と り ト ラ ン プ 鷗 外 忌
ゆ う ら り と 海 月 の 青 き 花 開 く
夏 至 の 夜 の コ ロ ッ セ オ な る し じ ま かな
ば ら の 棘 か ら た ち の 棘 朝 ぐ も り
老 鶯 と 骨 董 市 を ひ と 巡 り
瀬 の 迅 し 朝 な 夕 な の ほ と と ぎ す
著 莪 の 花 雨 傘 小 さ く た た み た る
車 窓 よ り 山 裾 ま で の 青 田 波
送 り 梅 雨 キ ー マ カ レ ー を こ と こ と
母 の 忌 の 風 吹 き 抜 け る 夏 座 敷

石 垣 真 理 子
相 川 健
山 岸 明 子
北 城 美 佐
山 内 宏 子
花 本 智 美
横 山 光 榮
青 木 ま ゆ 美
原 達 郎
山 田 世 都 子
井 上 つ ぐ み

増成栗人 選

第九回「鴻」俳句集 受賞作品

イエスタデイ

田邑利宏

春なれやイエスタデイの時報鳴る
蒲公英や谷戸の日向はすぐに失せ
春暁の滯峡を行く舟一艘
花菜風口いつばいのめはりずし
眠さうな檻のライオン桜まじ
葱坊主一人五厘の渡舟跡
聖五月蕾の多き花を買ふ
白南風やビルの谷間のテラス席
遠き日のことのやうにもソーダ水
炎昼の象の小さき眼かな

厚切りのビーフステーキ野分晴
槍投げの掛け声弾む天高し
払暁の霧立ち込める谷津田かな
正調の八木節を聴く里は秋
落つる時夕日まつすぐけらつつき
シャンソンの低く流れて小六月
まだ何か出来さうな気が石路の花
読みさしの散文詩あり冬菫
信号の赤の連なる二月尽
聖鐘のはるかに聞こゆ浅き春

1位

俳誌のサロン

春逡巡と

神野未友紀

春はあけぼの礁越す波越さぬ波
文机の向かふ春潮ふくれけり
ふらここの海の匂ひに包まれる
さへづれり鐘の一打と二打の間を
調弦の低き音する春景色
青麦のさはさは髪を切りに行く
リラ冷えや海を見下ろす礼拝堂
旅の荷を解く夕鐘のリラの街
花の夜のチェロ負ふ人と乗る電車
揚げたてのドーナツふたつ寒晴るる
明日を生きねば湯豆腐を掬わねば
日の短スノーボールの中に街
エスカレーター行き先は寒の夕焼け
春逡巡と暮れいるの凍り餅
芽吹きたる空あり笛を高く吹く
啓蟄の楽よ箏篳篥と笙
つちふるや楽座の足を組み直す
龍笛を抜け春宵の長き息
クレヨンの目鼻の香る紙雛
春の鳶未来の自分に出す手紙

2位

濡標

江部 博

大鷗に大鷗の添ふ春の沼
白樺派の地よ紅梅も白梅も
木洩れ日が直哉旧居の春の色
菜の花の微かな揺れと歩を合はす
一羽つつ鶉が羽たたむ濡標
春眠し釣師がひとり舟浮かべ
翡翠を待つ三脚の立つ水辺
別荘の梁に黒柿東風の吹き
橡の森巢立ち間近の鳥のこゑ
余寒なほ篠竹が坂覆ふほど
山笑ふリュックを背負ひ一万歩
産直の春たけのこで酒を酌む
春きざす湯気立つ蕎麦の二番線
春うらら響くアルトの祝ひ歌
花いまだ赤子を抱いて宮詣
陽炎うてミニSLに子らの列
木の芽どきマスク外さぬ日の続く
道を問ふ花見の宴の老人に
麗かやピアノを奏ふす姉妹をり
風光る沖へ競ひの帆が五つ

3位

俳誌のサロン

等目

鈴木 崇

秋晴の干潟に残る滯の筋
 木道に靴音高し臭木の実
 爽やかや神奈川宿の坂の上
 灯火親し中公新書のビリジアン
 冬小雨タブロイド紙を折り畳み
 極月やハンガー多き試着室
 返り花浅草寺裏賑はしく
 身軽なり羽子板市を冷やかして
 スクラップブックの高み日短
 とんび鳴く御用納めの空であり
 ブルーストの長編半ば去年今年
 一家団欒切山椒を分け合うて
 呼び込みの拍子木打つて猿回し
 人日やノートに写す木歩の句
 マフラーの巻き方変へて横浜へ
 箒目の残りたる馬場寒日和
 目鼻欠く馬頭観音冬日濃し
 待春や砲台跡に鳩の糞
 さざ波の耀ふ隅田川の春
 隴月廃校はいまアトリエに

総構へ

祐 森司

三月や竹のこゑ降る坂がかり
 石仏は布袋ほろほるとこぼれ梅
 雛の日の空と重なる武家屋敷
 曲り家の具足一領うららけし
 太刀打ちのための棒杭木の芽吹く
 畳に縁なし板敷の白樺
 春昼や小者の部屋の煙草盆
 二股を左ひだりへあたたかし
 指差して吐息の如き春の雲
 赤子泣き河津桜の三分咲
 十万石の土塁空堀鐘霞む
 一の門二の門子規の句碑に蝶
 青き踏み城の礎石の柱穴
 鳥雲に入りまぼろしの総構へ
 石段に合はぬ歩幅よ桃の花
 春愁やふと一木を見上げたる
 竜天に本丸跡を踏み惑ふ
 殿様の像と茶室と鳥の恋
 眺望の湖の輝き釈迦生まる
 春遅々とどこへもゆかぬ佐倉かな

乙女椿

後藤美帆

動かざる雪ぎつしりと伊吹山
 春の城ゆるりと泳ぐ小白鳥
 老人の煙草纏へる隴月
 ベランダにいつか見た彼春の星
 春うらら万葉の和歌口ずさむ
 鶏の啼く蓬の宮の日永かな
 さらさらと胸騒ぎして花の散る
 グラウンドに足跡ひとつ穀雨かな
 春日向重ね置きたる本の山
 春光を見送る人の影長し
 地下鉄をミモザ抱へて降りる人
 紅梅の百はこぼるる石畳
 清明の朝円を描く鳶かな
 三月のあなたとアフタヌーンティー
 色無地の裾を押さへて春一番
 土降るや石垣白き名古屋城
 春の雪亡き人の指白くなる
 春の雷みな図書館に雨宿り
 朝まだき乙女椿の雫かな
 雨二日春大根を茹でてゐる

夏帽子恨

針谷忠郎

青空に臘梅の黄の香り立つ
 ふたりして田島原の青き踏む
 花満開けんけん跳びの子らの声
 通りやんせ川越城の花吹雪
 十葉の囲ふ生家の古屋敷
 茹で上げし空豆口に青き味
 味はひし生家の庭の茗荷の子
 半夏生の咲きし茶店の客となり
 二年振り馴染みの店の夏暖簾
 灯台へ辿る道すじ合歓の花
 旅の宿リュックふたつと夏帽子
 新涼やコーヒーミルをゆつくりと
 初紅葉鳴く鳥影を追ひかくる
 咲き初めし白き野菊が道の辺に
 本土寺の桜紅葉の散る小路
 大声の屋台の売り子秋祭り
 脇道にそれて木通の目の前に
 里からの便り色付くさくらんぼ
 冬薔薇窓辺の紅茶温かし
 行く年やワインで妻と乾杯を

春の寺書

霜鳥和子

間近に来て見上げる塔に冬の月
 隅田川の橋の電飾十二月
 極上の寒波到来にこり酒
 二月の一人の朝餉かんたんに
 春一番まかれて帰心つのりけり
 水仙の冷たき香り帰へるうか
 毛糸帽一日被り疲れたり
 襖絵の虎が牙むくもどり寒
 日も月の夕映の中寒ゆるむ
 輪の中に福耳の人のどけしや
 春昼の向き合ひて知る左利き
 宵と云ふ心のゆるむ雪柳
 勝手口あまり使はず弥生かな
 起き出でて昨日に変わる寒さあり
 日表へ大きく羽翔く紋白蝶
 もたれある橋の欄干春休み
 佐保姫は向ふ岸なり波光る
 ブックカバー形見となりし余寒かな
 台東区浅草二丁目花の雨
 仲見世の通り真つ直ぐ春の寺

6位

4位

7位

5位

8位



「築地・橋づくしの世界」

鈴木 崇

二〇二二年は三島由紀夫没後五十葬の年だった。

以前なら死後五十年で著作権が切れていたのだが、TPP交渉により著作権保護期間が延長され、死後七十集となった。三島作品を青空文庫などで自由に読めるようになるのは二〇四一年以降である。

とはいえ、三島は過去の作家という気がしない。自ら演出した『三島由紀夫伝説』が今でも有効ということか。著作権切れを迎える時代にどのような作家像を保っているのか、興味深いところではある。

今回は、三島由紀夫の短編「橋づくし」を取り上げる。

「橋づくし」は、代表作『金閣寺』を書き上げたあとの時期に書かれ、名短編との世評も高い。

舞台は築地界隈。中秋の名月の夜、無言のまま七つの橋に願掛けをして渡れば願いが叶うという言い伝えに従って花柳界の女性四人が橋を巡る物語である。

一体誰が無事に渡り切ることができのだろうか。的確な描写でグイグイ読者を引っ張る。

七つの橋は、築地川に架かる橋である。作中に登場する橋のうちいくつかは現存しているが、川は埋め立てられ高速道路と化し、陸橋となっている。

七つの橋を巡って「橋づくし」の世界を歩いてみた。

最初に渡るのは、Y字型の三吉橋。三叉なので二辺を渡り二つに数えるという、イレギュラーな順路である。

「橋の欄干は低く、その三叉の中央の三角形を形づくる三つの角に、おのおの古雅な鈴蘭灯が立っている。」

橋の袂に「橋づくし」の記念碑がある。説明書きと彼女たちが渡った経路の略図も示されている。

「第三の橋は築地橋である。ここに来て気づいたのだが、都心の殺風景なこういう橋にも、袂には忠実に柳が植えてある。」

柳の並木は今でも界限に残っており、花柳界の風情をわずかながら感じさせる。柳の葉を揺らすのは川風ではなく、自動車であるのは、無粋だが。

「入船橋の名は、橋詰の低い石柱の、緑か黒か夜目にわからぬ横長の鉄板に白字で読まれた。」

ここまでは陸橋の姿をとどめているが、残りの三橋は撤去されている。川の埋め立て地が築地川公園として整備され、園内に親柱や名板が説明書きとともに残っている。

「五番目の眺橋の、毒々しいほど白い柱がゆくてに見えた。」

ちなみに願を掛ける女性のうちここまで残るのは二人である。さてどちらが渡り切れるのか。

「第六の橋はすぐ前にある。緑に塗った鉄板を張っただけの小さな堺橋である。」

堺橋は親柱が子もたちの遊ぶ遊具近くに保存されており、まじまじと説明書きを読み、写真を撮っているのは、ちよつと気まづかった。

「三味線の箱みたいな形のコンクリートの柱に、備前橋と誌され、その柱の頂きに乏しい灯がついている。」

願掛けに成功したのは誰か。是非名短編を味わって確かめていただきたい。



羽音集

谷口摩耶 選



帯揚げの色はきみどり梅雨晴間

習志野

野村昌代

紅薔薇や吉屋信子の記念館

まつくろな鉄の蝶番炎暑かな

秋近き家庭文庫の模様替へ

番傘のうしろ姿や蓮の花

名古屋

後藤美帆

この腕に子を抱きたしダリア咲く

才能は買ふことできず雲の峰

フルーツゼリー二つ螢のとぶ夜は

炎天を来てワクチンの順を待つ

冷し麺能の地謡空耳に

松戸

綾戸五十枝

遠雷や小瓶の中の星の砂

麦酒飲むこの夕焼を惜しみつつ

家中のカーテン洗ふ土用入

サザエさんの文庫三巻夕立晴

犬の舌長くなりたる大暑かな

豊川

三浦信行

それぞれの形に露地の蕃茄かな

浴衣掛け夜風よろしき島の宿

八橋の乾かざる日々さつき雨

水羊羹友を待ちつつ井に浸し

岳ビール飲み干し窓に富士の山

茶庵閑話 64

虫丸

